

JA全農ウィークリー

6-7面

スタートアップインタビュー

「やさいバス」で新たな価値創造に挑む

(株)エムスクエア・ラボ 代表取締役 加藤百合子さん(広報・調査部)

3面

来年1月に
「第5回和牛甲子園」を開催（畜産総合対策部）



20県36校の「高校牛児」たちが日頃の成果を競う(3面)



農畜産物直売所「とれたて元気市 広島店」
を10月14日にリニューアルオープン(2面)



加藤さんが取り組む農産物物流の新しい仕組み「やさいバス」や、壊れないビニールハウス「ニンジャハウス」(6-7面)



2 「Farm Love with
ファーマーズ&キッズフェスタ」で
「ニッポンエール」をPR
(耕種総合対策部・営業開発部)

農畜産物直売所
「とれたて元気市 広島店」
リニューアルオープン(広島県本部)

3 10月9日は「仙台牛の日」で
キャンペーン展開(宮城県本部)

4 海外拠点便り

(ウィリアム・H・マイナー農業研究所)

5 JAズームイン (福島:JAふくしま未来)

8 カーリング女子&ミックスダブルス
日本代表が決定!
選手の皆さんと大会を「ニッポンの食」で応援
(広報・調査部)

JAタウンショップ紹介

JA大潟村(秋田県)

**Web版JA全農ウィークリーは
こちらから**



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

Web
限定

サッカー「ブラウブリッツ秋田」と コラボ企画を開催（秋田県本部）

米消費拡大狙いパラパラ漫画動画を公開 (千葉県本部)

News!



「Farm Love with ファーマーズ&キッズフェスタ」で「ニッポンエール」をPR

農業と国産農畜産物の魅力を発信

耕種総合対策部・営業開発部

耕種総合対策部TAC推進課は10月2日、日本農業法人協会主催の「Farm Love with ファーマーズ&キッズフェスタ」に出展し、国産素材を使用した農産加工品シリーズ「ニッポンエール」を消費者に向けてPRしました。

このイベントは、日本全国のプロ農業者と食農関連事業者が集い、消費者との交流やこだわりの農畜産物の販売を通して農業と国産農畜産物の魅力を発信することを目的に開催されました。会場となった商業施設「コ子玉川ライズ」(東京都世田谷区)では、同協

員による農産加工品の販売やステージでのPRが行われ、ファミリー層を中心とする多くの来場者でにぎわいました。

「このイベントは、日本全国の味が人気があるのか」など多数の問い合わせをいただくなど大変好評で、準備した商品はほぼ完売しました。

今後も日本農業法人協会と協力し、国産農産物の良さを消費者に伝えていきます。

全農はメインスポンサーとして参画し、新発売の28種の果実グミをはじめとする「ニッポンエール」商品を営業開発部と共同で販売しました。訪れた方からは「通常はここで買い求め



28種の果実グミを販売

News!



農畜産物直売所「とれたて元気市 広島店」リニューアルオープン

「JA-eCAT」コーナーを新設し生産者ニーズにも対応

広島県本部

広島県本部は、農畜産物直売所「とれたて元気市 広島店」を10月14日にリニューアルオープンしました。

同店では県内約2000人の生産者が出荷する旬の野菜や果物、花きなどをはじめ、米、精肉、鮮魚、卵の販売の他、新たに、総菜を製造・販売する「みのり

みのるキッチン」や、スイーツや飲料を販売する「みのりカフェ」を展開します。

また、生産者向けにデジタルサイネージやPC・タブレットを活用し、生産資



「とれたて元気市 広島店」リニューアルオープン式典のテープカットの様子(広島市)

材の購入や営農情報の検索が可能となる「JA-eCAT」コーナーを店舗内に新設しました。

発注情報のやり取りを電子化することで、JAグループ全体の事務の合理化や職員の営農指導にも生かせるシステムとしてデジタルトランスフォーメーション(DX)にも力を入れ、生産者のニーズに対応していきます。



来年1月に「第5回和牛甲子園」を開催

20県36校の「高校牛児」たちが日頃の成果を競う

畜産総合対策部



2022年1月21日（金）開催

開催場所：農産物振興センター（東京都中央区）

畜産総合対策部は2022年1月21日、「第5回和牛甲子園」をオンライン形式で開催します。過去最多の20県36校が出場する予定です。

和牛甲子園は「和牛を飼育する農業高校の生徒」が「高校牛児」の大会です。全国の高校牛児が和牛飼育の取

り組みと、その成果としての枝肉の肉質を競い合います。第5回には新規参加県が1県、新規参加校が5校の合計20県36校51頭と、過去最多の高校と肉牛が出場する予定です（前回は19県33校47頭）。

新型コロナウイルス

感染防止の観点から、前回と同様に主会場のAgventure Lab（東京・大手町）と各出場校をオンラインでつないで行います。また、枝肉共励会は例年通り、東京食肉市場で行います。当日はYouTubeで大会の模様を配信しますので、高校牛児たちの熱い戦いをぜひご覧ください。

ホームページはこちら



10月9日は「仙台牛の日」でキャンペーン展開

「仙台牛」の銘柄認知度向上と消費推進を目指す

宮城県本部



番組で仙台牛を堪能するパーソナリティの安田レイさんとジョージ・ウィリアムズさん

宮城県本部と仙台牛銘柄推進協議会は「仙台牛」の魅力を全国へ発信するため、10月9日の「仙台牛の日」に合わせて、さまざまな取り組みを行いました。

今年は、TOKYO FM 系列38局ネットで放送する「JA全農COUNTDOWN JAPAN」内で、抽選で22人に仙台牛が当たるプレゼントキャンペーンを実施しました。放送内では、パーソナリティのジョージ・ウィリアムズさんが仙台牛を堪能しました。仙台牛公式インスタグラムでも、人気の調理アイテムや仙台牛が当たる「スキスキ仙台牛ハッシュタグキャンペーン」を11月14日まで展開しています。

さらに、仙台牛を気軽に

食べてもらうことで生産者の応援につなげようと

7月からスタートした「せんぎゅう丼」の第2弾として、11店舗、7つの新メニューが加わりました。仙台市内の「CROSS B PLUS」では、「仙台牛ウチモモのグリル」などの特別メニューを期間限定で提供しました。プロサッカーチーム・ベガルタ仙台とはクラウドファンディング「生産者家応援プロジェクト 仙台牛を食べて応援しよう」を立ち上げ、食べて生産者を応援する企画を実施し、目標額を達成しました。

新型コロナウイルスの影響で、消費者を招いてのイベントは実施できませんでしたが、引き続き、仙台牛の銘柄認知度向上、牛肉消費へつなげる活動に取り組めます。

仙台牛銘柄推進協議会



仙台牛 Instagram



ウィリアム・H・マイナー農業研究所

大酪農地帯での共同試験を実施 得られた知見を日本に発信



ウィリアム・H・マイナー農業研究所

全農は1996年から米国ニューヨーク州北部にあるウィリアム・H・マイナー農業研究所(マイナー研)と業務提携しています。全農の飼料畜産中央研究所の職員1人が現地に駐在しており、乳牛の飼養管理・商品開発に関わる共同試験と米国の知見の情報発信を行っています。

マイナー研は、1915年に当地出身のウィリアム・H・マイナー氏が創設した農場を前身とし、1951年に設立されました。酪農分野における教育、研究および地域貢献に力を入れています。直近では、約500頭の搾乳牛で、年間平均乳量1万4000kg/頭を超える高成績を安定して維持しています。州内外を問わず、酪農後継者や学生の研修を受け入れながら、国内外の企業、州政府、米国政府(農務省、環境保護庁)との共同研究を実施しています。

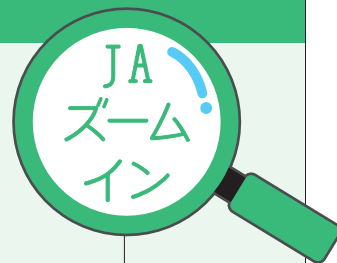
全農とは、移行期の飼養管理、トウモロコシ代替原料の評価、粗飼料・繊維発酵の評価と給餌戦略、子牛の飼養管理などの共同試験を実施してきました。得られた知見は商品開発、担当者のスキルアップに活用する他、毎年日本で開講する「全農酪農セミナー」を通して農家の方々へも情報共有するなど、日本の酪農生産現場で活用されることを目指しています。

新型コロナウイルスの影響により、二部の教育プログラム・セミナーなどがオンラインでの実施に移行していますが、昨年マイナー研が主催したオンラインセミナーでは米国内外から3500人を超える参加者があるなど、新しい情報発信の仕方も模索しています。

牛たちのイチオシ現地食

ニューヨーク州は米国でもトップ5に入る乳生産量を誇る一大酪農地帯です。マイナー研では自給のコーンサイレージを豊富に使用し、嗜好性の高い完全混合飼料(TMR)を牛の好きなだけ食べさせる最高の食卓づくりを常に目指しています。「実入りよし!切断長よし!発酵品質よし!今日も美味である」(牛より)。





若手職員らが農畜産物PRチームを結成

農産物の魅力やレシピを動画で紹介

JAふくしま未来は2016年3月1日にJA新ふくしま、JA伊達みらい、JAみちのく安達、JAそうまの4JAが合併し誕生しました。福島県北地域と相馬地方を管轄する広域JAで、管内面積は福島県の19%を占めています。

県北地域は気候特性を生かした果樹栽培が盛んです。桃、リンゴ、梨など全国有数

の産地で、桑折町は「献上桃の郷」として知られています。相馬地域は太平洋と阿武隈高地に囲まれた温暖な気候で、平坦部では水稲、山間部では畜産が盛んです。管内全域で果物、野菜、水稲、畜産がバランスよく生産されています。

若手職員が 地域農産物の魅力を SNSで発信

JAふくしま未来は20年11月、若手職員たちによる農畜産物PRチーム「J-FAP（ジェイファップ）」を結成しました。

メンバーは、管内の福島・伊達・安達・そうまの各地区から選抜された平均年齢26歳の職員12人で、営農指



桃をPRするJ-FAPのメンバー

導員から金融共済の窓口を務める職員まで担当部署はさまざま。生産者と消費者の架け橋となって農畜産物をPRする事を目的に結成されました。

主に販売促進活動や農産物の贈呈式などで活躍しますが、このチームが特に注力する取り組みは、動画投稿サイトYouTube上

JA ふくしま未来 (福島県)



概要

令和3年2月末現在

正組合員数	4万5804人
准組合員数	4万8412人
職員数	1220人
販売品取扱高	287億1千万
購買品取扱高	96億8千万
貯金残高	7348億5千万円
長期共済保有高	2兆4687億7千万
主な農畜産物	桃、キュウリ、 あんば柿、梨、リンゴ、水稲



旬の梨を使ったレシピを紹介

で同JAが運営する「みらいチャンネル」でのPR活動です。毎月1回、メンバーが旬を迎える農産物の圃場を訪ね、農産物の魅力や生産者のこだわりを伝える動画や、その農産物を使った料理レシピを紹介する動画などを配信していて、若手が頑張る姿は視聴者から好評を得ています。

「みらいチャンネル」では、JA女性部員が伝統料理を紹介する「かあちゃん直伝女性部レシピ」シリーズ

や、管内の景色を小型無人飛行機（ドローン）で撮影した「ドローンで見える故郷の風景」シリーズを随時更新し、インターネット交流サイト（SNS）を活用した管内の風土や歴史、地域の魅力を伝える「新しい発信」に力を入れていきます。



圃場で農産物の魅力を伝えるメンバー

「みらいチャンネル」
はこちら



各イベントで活用するメンバーの顔と名前入りののぼり



「やさいバス」のしくみ

「情報」と「ヒト」を「物流」でつなぐ
「やさいバス」で新たな価値創造に挑む

(株)エムスクエア・ラボ 代表取締役 加藤百合子さん

異業種から「ひらけ日本の農業」をテーマに起業した女性が今注目されています。農業ロボット、壊れないビニールハウス、縦型水耕栽培、デザイン・IT支援事業など、さまざまな事業を手掛けるパワフルな起業家・加藤百合子さんに、農産物物流の新しい仕組み「やさいバス」の取り組みを中心にお話を聞きました。

【広報・調査部】

起業のきっかけを
教えてください。

もともとは工業系の仕事をしていた。2人目の子どもを産んだあとに「子どもたちに見せられる仕事がない」と思い、農業経営者を育成する静岡大学の社会人講座に通いました。そこで農業の実情について知り、自分の培ってきた技術で課題解決に貢献できるのではないかと、2009年に起業しました。

最初は農産物を買りたい人と買いたい人、農機を貸したい人と借りたい人の情報シェアサイトを立ち上げましたが鳴かず飛ばずでした。パソコンを使う



9 産業と技術革新の
基盤をつくらう



生産者が少ない時代だったので「10年早かったね」と最近言われます。その後、農家と需要者の需要マッチングを直接支援する「ベジプロバイダー事業」を行いますが、ここで物流や受発注を変えないと広がらないと気付きました。こうした経験から受注のシステム化と共同配送という仕組みに思い至り、「やさいバス」を始めました。

「やさいバス」の
仕組みについて
教えてください。

出荷したい生産者(現在事業展開する7都道県で700人)がアプリ上で出品登録します。

買い手(同2000人、主に小売り業者と外食業者)がそれを見て「品目・数量・希望日」を指定します。生産者が決められた日時に近くの停留所(と呼ばれるストックポイント)に農産物を置くと、バス(と呼ばれるトラックやバン)が取りに来ます。それを別の停留所に降ろして、買い手が受け取る。まさに地域内循環バスの乗客が野菜のイメージです。運賃は1ケース350円で、買い手が負担します。鮮度の高い野菜を安い運賃で地域内循環できる仕組みです。

全国からの注目度も
高いと聞きます。
導入する際の成功要因は
ありますか？

地元・静岡から始めた取り組みですが、全国さまざまな地域から問い合わせがあります。郵便局や鉄道、ガソリンスタンド





松坂屋静岡店もバス停の一つ



農産物の受け渡し



「やさいバス」のバス停



まちを走るやさいバス



運送には旅客バスも利用

など、地域のインフラ事業者からの関心も高いです。この事業では地域のたくさんの人に参加してもらいますので、取り組みを通じて地域コミュニティの活性化への期待も高いと感じます。現在は「やさいバス」を導入したいと手を挙げた地域と話を進めて導入地域を広げているところです。いずれは全国制覇したいと考えています。

導入に当たっては熱量の高いチームづくりが成功の条件です。地域行政の参加は必須で、できればJAにも関わっていただきたいです。既にJA松本ハイランド(長野)やJAやさと(茨城)などと協業しています。また、全農広島県本部、神奈川県本部とも取り組みを進めています。

コロナ禍で事業に影響はありましたか?

もともと買い手は外食業者が多かったのですが、昨年は大きく売り上げが落ちました。それを受けて小売業者に声掛けしたところ功を奏しました。コロナ禍で遠出ができないことから地元地域の価値を見直そうという機運

があつたこと、カーボンニュートラルの観点から、なるべく地元で調達して温室効果ガスの発生を抑制しようという動きとマッチしたと思います。

「やさいバス」以外にもさまざまな事業に取り組んでいますね。

「モバイルムーバー」(写真①)という農業向けの移動ロボットを開発しました。現在は(自身が社外取締役を務める)スズキなどと新しい車体の開発に取り組んでいます。農産物の運搬や防除・除草作業への活用ができる機器です。また台風に近いビニールハウス「ニンジャハウス」(写真②)や、縦型の水耕栽培「フールドオール」(写真③)、デザインとITで農業を支援するため

の会社を台湾に設立したりもしています。
最後に、とてもパワフルな加藤代表からJAグループに期待することを
お聞かせください。

農業に関わるさまざまな機能を持つJAグループは、地域にとってはなくてはならないインフラです。その機能を存分に発揮するため、私たちのようなベンチャーと交わり血を入れながら時代に合わせて変化してほしい。そしてJAグループがクリエイティブで楽しい農業を実現する主役になることを期待しています。

(株)エムスクエア・
ラボのサイトは
こちら



写真①「モバイルムーバー」を利用した農業散布



写真②台風にも強い「ニンジャハウス」



写真③縦型水耕栽培「フールドオール」

カーリング女子&ミックスダブルス日本代表が決定!

選手の皆さんと大会を「ニッポンの食」で応援



女子日本代表決定戦の様子



LOCO SOLAREの皆さんへ副賞を贈呈



松村・谷田のお二人へ副賞を贈呈

全農は北海道・稚内市みどりスポーツパークで開催された「全農2021女子カーリング日本代表決定戦」、「全農2021ミックスダブルスカーリング日本代表決定戦」に特別協賛し、出場した選手の皆さんを「ニッポンの食」で応援しました。【広報・調査部】

9月10日から12日に開催された女子決定戦では、LOCO SOLARE(ロコソラーレ)と北海道銀行が熱戦を繰り広げ、LOCO SOLAREが日本代表の座をつかみ取りました。

ミックスダブルス決定戦(同18日~20日)では松村・谷田が吉田・松村、竹田・竹田との三つどもえの戦いを制し、勝利。勝利した両チームは今年度内に開催される国際大会に日本代表として出場します。

全農は、勝利チームに副賞として東北6県のお米と「海外遠征時のお食事サポート券」を贈呈。さらに、女子決定戦でMVP賞に輝いた鈴木夕湖選手(LOCO SOLARE)には全農が運営する産地直送通販サイト「JAタウン」のギフトカードを贈呈しました。また大会期間中、選手エリアに「もぐもぐブース」を設置。出場選手の皆さんのハーフタイムや試合前後でのエネルギー補給用の食品を提供し、「ニッポンの食」をパワーに変えていたできました。



もぐもぐブースで商品を選ぶ
吉田・松村の吉田夕梨花選手

©JCA IDE



JA全農のインターネットショッピングモール
JAタウン ショップ紹介

JA大潟村

「パンプキンパイ」は、秋田県大潟村特産のカボチャを使用したあんを、バターたっぷりのパイ生地で包み込み、一つ一つ丁寧に焼き上げた手作りパイです。一口食べると、ホクホクのカボチャあんのやさしい甘みが、口の中いっぱいに広がります。販売開始から30年以上変わることのないこだわりの味は、お子さまからご年配の方まで幅広い世代に親しまれています。

家族の団らんのひとときや、大切な方への贈り物に、JA大潟村の「パンプキンパイ」をぜひ、ご利用ください。



パンプキンパイ 1箱20個入り...
3680円(税込み)



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは ☐ shop@ja-town1.com

ご注文は
こちらから



『JA全農トピックス』の
ツイッターはこちらから



私たち全農グループは、
生産者と消費者を 安心で結ぶ懸け橋
になります。